報道関係資料

2016年8月

Since 1907

日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書

約3,000点の新作・入選作が全国から集まり、一堂に会します。
熱気あふれる会場で今年の日本の美をみつけてください。

改組 新 第3回

日展

平成28年10月28日(金)～12月4日(日)
午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）
※11月12日(土)は「日展の日」として、入場無料となります。
火曜日休館／国立新美術館

会期中は作家による解説、講演会なども多数開催されます。

報道関係
お問合せ先

日展広報事務局　㈱IMPRESSION内　担当：安田・松井
TEL 03-6312-4098　FAX 03-6862-6727　e-mail: sr@mbr.nifty.com
〒107-0062 東京都港区南青山2-18-20南青山コンパウンド502

切磋琢磨して
高い次元の
作品を制作する

奥田小由女

絵は教わるものではない。
自分で考えて描く

鈴木竹柏

その時の感動は
忘れられない。
今はもう見ることが
できない光景

塗師祥一郎

報道関係資料

芸術とは何か
創作とは何か

日展

六人の作家の
インタビュー

一点一点が次に
繋がるように、
自分自身が
どう覚悟して作るか

中村晋也

毎年違うものを、
少しでもいいものに
挑戦します

三谷吾一

日本人である以上
何事も美しくありたい。
自分の書く字も
美しくありたいものです

日比野光鳳

はじめに

日展は、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五つの部門からなる公募展で、世界でも類をみない総合美術展として開催しております。日本では、作家は公募展に出て世に認められていくことが多く、競い合い切磋琢磨することですぐれた芸術作品を生み出してきたという伝統があります。

歴史をさかのぼれば、江戸時代の長い鎖国の後、日本が産業の育成と同時に芸術文化のレベルアップの必要性を感じているなか、文部大臣の牧野伸顕が、オーストリア公使時代より日本の美術の水準を高めたいと願い、一九〇七年に文展を開催しました。これが日展のスタートです。

その後、文展は「帝展」「新文展」「日展」と名称を変えつつ、一〇九年目になります。当初は日本画、洋画、彫刻の三部門でしたが、一九二七年に工芸美術、一九四八年に書が加わり、総合美術展となりました。一九五八年より民間団体となり、二〇一二年からは公益社団法人となりました。

二〇一三年十月に審査に関する報道があって以降、より透明性のある開かれた日展を目指し、審査体制や組織の改革に取り組んでまいりましたが、この改革を機に二〇一四年、展覧会名称を「改組 新 日展」に改め、今年は「改組 新 第三回日展」として開催いたします。

日展は、毎年十月に作品公募を行います。応募者は全国各地の十代から百歳まで、さまざまで、昨年度の応募点数は一二〇〇七点。そのうち入選は二二六八点（内新入選は三五五点）で、会員の作品など六九五点を合わせ、計二九六三点が展示されました。

今年も、約三千点の作品を一か月にわたり国立新美術館に展示し、その後、京都、名古屋、大阪、富山と四会場を巡回いたします。現代を生きる日本の作家の新作が一堂に会す、熱気あふれる会場で、ぜひ多くの方に日本の美のいまを体感いただければ幸いです。

ここに、一万人を超える日展作家のなかでも理事長をはじめ六人の作家の現在の考えをインタビューにまとめました。ご一読いただけましたら幸いです。なお、中堅、若手作家のインタビュー集は後日配布させていただきます。

日展広報事務局

日展 6人の作家のインタビュー 目次

人形作家・日展理事長
01 奥田小由女 Sayume Okuda p2

日本画家・日展顧問
02 鈴木竹柏 Chikuhaku Suzuki p6

洋画家・日展顧問
03 塗師祥一郎 Shoichirou Nushi p10

彫刻家・日展顧問
04 中村晋也 Shinya Nakamura p14

漆芸家・日展顧問
05 三谷吾一 Goichi Mitani p18

書家・日展顧問
06 日比野光鳳 Kouhou Hibino p22

芸術とは何か
創作とは何か

01

人形作家・日展理事長

奥田小由女

Sayume Okuda

天空への祈り　2015年 改組 新 第二回日展

ご主人で日本画家の故奥田元宋さんがかつてアトリエにされていた岩絵の具の瓶がずらりと並ぶ広い和室に大きなテーブルが置かれ、次の展覧会に出品する色鮮やかな人形作品が並んでいる。レリーフ作品もある。胡粉を使った白く美しい肌の人形を作り続ける人気作家であり、日展理事長の奥田小由女さんのアトリエを訪ねた。

高校時代に東京で創作人形と出会う

大阪府堺市に生まれた奥田さんは、幼少のころ父親を亡くし母親の郷里の広島へと移り住んだ。広島の家には、上村松園の「序の舞」の大きな複製があった。「すごく魅力的で衝撃的でこんな素晴らしいものを女性の方が描くのがあるのかと思って、それが一番最初の絵に対する憧れのようなものでした」。中学時代に写生大会で賞をもらったことも。その後ご主人となる奥田元宋氏は郷里が同じ広島で、大会の審査員をしていたという。

奥田元宋氏と同じ、広島県私立日彰館高校に進む。そこでは、美術部や演劇部などいろいろな活動をしていた。「すばらしい先生がたくさんいらして劇団の公演や展覧会などがある度に、広島から何時間もかけて東京へ連れていってくれました」。先生が本はいくらでも貸してくださり、恵まれた忙しい日々で、個人的にいろんなことを学ばせていただいたという。

そうした中、ブルーデルの彫刻が来るということで東京に連れてきてもらったとき、「創作人形」に触れる機会があった。彫刻でも絵画でもなく、小さいが内面のある「人形」というジャンルがあることを初めて知った。お雛様や天神様は知っていたが、そうではなく、自分の思いを形に作る、彫刻とは違う別の世界だった。どうしてもこの世界をやってみたいと思い、美術学校にはないので、調べたり紹介してもらい、紅実会人形研究所の林俊郎氏に師事することになり上京した。昭和三十年のことだ。しかし、入ってみると、人形の世界をたくさん学ぶことはできたが、それはかわいい一般的なきれいな人形で、心の中で描いていたものとは違っていた。

自分だけの人形の世界を探し求めて

自分だけのものを探し当てるのにはいろいろ勉強しなければいけなかった。それには時間がかかった。

ヨーロッパに作品を見に行った。「当時ソ連廻りで二十時間かけて行きました。フランスやイタリアなど、知り合いもいてお世話になったりしながら。彫刻も日本で思っていたのと全然違う。それが非常に刺激になりました。誰が作ったかわからないような大きなお墓が彫刻的で驚いたり、皆が行かないような所でもいろいろ訪ね歩きました」。

一方では人形の制作に取り組んだ。当時は日本の高度成長期、創作的な作品を百貨店に納めるように言われて納めると、好評で売れたという。仕事をして一生懸命お金を貯めてはヨーロッパに行った。しかし、百貨店に人形を何回か納めていると、一週間もしないうちに業者が買って解体して同じモノを作り出した。「著作権など考えないころです。それではだめだと思ったり、そういう時代もありましたが、自分が目標とするものがみつかるまでは頑張りたいと思いました。まず、世田谷の奥沢に小さなアトリエを持ち、それから日展を目指しました」。

Profile

1936年、大阪府堺市生まれ。ほどなく広島県に移る。1955年、広島県日彰館高等学校卒業後、人形作家を志して上京。1966年、光風会展入選、1967年、日展入選、日本現代工芸美術展入選。1972年、日展特選、光風会会員となる。1979年、日展審査員、1983年、光風会を退会、現代工芸美術家協会理事。1988年、日展評議員、同文部大臣賞受賞。1990年、日本芸術院賞受賞、1998年、日本芸術院会員、2008年、文化功労者。2014年、日展理事長に就任。三次市名誉市民として顕彰。現在、日本芸術院会員、日展理事長、現代工芸美術家協会副理事長。

彫刻と絵、胡粉を勉強

思い描く造形を作るには彫刻も絵も勉強しなければいけない。彫刻の先生のところでクロッキーをさせてもらったり、木彫の方法もずいぶん教わった。

胡粉を膠とあわせて練り溶きおろす方法は、秘伝ということで、伝統工芸の人にもなかなか教えてもらえず実践を繰り返した。

「白の時代は桐を彫って造形していました。日本の胡粉は美しく品よく最高のものですが、お顔にちょっと塗るくらいしか、もろくてできなく、使いにくいものです。全体に使うとひび割れてどうしようもないものでした」

しかし、もっと広い範囲で日本古来からの美しい素材で作りたいと思い、失敗を繰り返しながら大きなものにも挑戦して、仕上げることができた。

「ちょっとした陰りも出るような厳しい世界で真っ白で仕上げてみたいということで、長い間白の制作をしていました」

白の時代の彫刻的な立体作品の時期に入る。明らかな人物像ではなく、人物が感じられる造形的な作品である。

日展初出品は落選。次は初入選となりそれからは、毎回入選を続け現在まで一度も休む事なく出品を続ける。

入選二回目の作品「歓」は昭和女子大学学長、人見楠郎先生が日展の会場で初対面で御買い上げとなり後に同大学の校庭にモニュメントとして設置される。

日展に出し始めて五年目のころ、ＮＨＫで日展の山崎覚太郎先生、杉山寧先生、河北倫明氏が作品解説をする一時間番組があった。その企画で、特選の次点で若い人の良い作品があったら一つずつ選び、作家に出演してもらおうということになった。彫刻、日本画、工芸美術の三人で、奥田さんが選ばれた。

或るページ　１９７２年　第四回日展　特選

「緊張して震えるようになって出演しました。その時に山崎先生が『華かなのは一科の日本画。工芸美術はもともとすばらしいのに四番目で残念だ。若いお前たちが工芸美術だけで埋もれるのではなくて、全科の人に理解されて外の人にも認めてもらえるように目指してもらわなくては困る』とおっしゃったのです。各先生がよくしてくださり、おしりを叩かれ、厳しい指導をしていただきました」

翌年、一九七二年、「或るページ」で特選を受賞。「たまたま窓辺に置いていた本のページがめくれて、アールの感じが瞬間素敵でした。ただ本を作るというのではつまらないので、人生の中にはいろんなページがある。その思いが立体になった作品です」

今までにない作品ということで満票で特選となり、翌年から日展の出品作のなかに「○○のページ」という類似作品が五点も出るほど大きな影響を与える作品となった。

一九七四年の第六回日展で「風」が再び特選を受ける。「風」は産経新聞社の鹿内信隆社長が日展会場で初対面で彫刻の森美術館にと買い上げとなった。この頃は白を基調とした抽象的な造形表現を試みていたが、奥田元宋氏と結婚する前後から、色彩豊かな女性像の作品が中心となる。

色の世界では、水に溶ける水干絵具を一色ずつ作っていった。部屋にずらりと並ぶ色とりどりの岩絵の具はざらざらして人形には使えないという。胡粉は元々貝の粉なので溶け合ってきれいに光沢が出てくる。何回も塗り重ねると巻のいい真珠のような状態になる。その真珠の光沢のようなものが肌から出る。奥田さんの美しい人形の肌の秘密である。正面から見ると感じられないが、横から見るとほんのり輝きが見える。

日展は個性や持ち味、人柄が作品に出る

「伝統工芸では技術などを伝承しなければいけないのですが、日展はその人の個性の美を出すということなので一代でもいいのです。そこが違います。個性や持ち味、人柄が作品に出ますので面白い。日展は歴史が長いし、伝統的なものがあるのですが、ただ技術を伝えていくだけでなく革新的なものもあると思うのです。伝統的な日本画のような所でも個性の新しいものが出てきていますから、そこに日展の魅力があるのではないかと思うのです」

月の別れ　２００５年　２１４×１１６×４５

レリーフの大作を手がける

「広島の元県知事が非常にファンになってくださって、広島県女性総合センターができる時にレリーフをやらないかと言ってくださり、初めて大作を作りました」。長さ十三メートル、縦二メートルの壁面で、建築の中に一緒に組み込まれていくもので、人形というよりも、時代を超えていく芸術作品である。何カ所か手掛けてきた。「普通人形は小さいイメージで、大きなレリーフを作る方はほとんどいないのですが、やはり日展だからできると思うんです。陶芸作家も壁面を陶板で作ったりしています。そういうことが発想次第で自由に許されるのも日展は面白いと思います」

また郷里の三次市に、御夫妻の美術館設立の話があり、生前奥田元宋氏とともに大きな作品を入れようと話していた。その後亡き夫を偲び、二〇〇五年に高さ二メートルの人形作品「月の別れ」を納めている。

切磋琢磨して高い次元の作品を制作する団体

日展で制作活動をする一万人を越える作家を理事長として牽引する奥田さん。「日展は美を作って発表する集団で、お互いに切磋琢磨するところです。大きな団体が嫌だと辞めてしまう人もいますが、その後伸びるかと思うと消えていく。大変かもしれないけれど、大きな舞台でそこに自分をさらすのは素晴らしいことだと思うのです。みな必死の思いで一番良いものを出したいと頑張っています。誰でもスランプなどありますが、続けるということはすばらしいことで大事なことです」。

工芸美術は日本独自のものが多い。

「最近は竹を扱う若い人が世界的に認められて生き生きと力強い仕事をしています。みんなに世界的な光が当たらなくてはいけないんだと思います」

奥田さんが強く望むのは、作家が本当に元気を取り戻して思い切り仕事ができるような環境を作ることだ。

「作家集団ですから一人一人が純粋に仕事をして、いかにすばらしいものを制作し発表できるかなのです。日展はまったく体質が違う五科が集まっているのも珍しいことです。少しでも多くの人に、外国の方にも日展作家たちの作品を見ていただきたい。そうして作家全体が元気が出るといいと思っています」

02

芸術とは何か
創作とは何か

日本画家・日展顧問

鈴木竹柏

Chikuhaku Suzuki

春陽 2015年 改組 新 第二回日展

かつて日展の理事長、会長を務め、現在顧問である日本画家、鈴木竹柏さんは、文化功労者でもある。葉山の高台にあるアトリエの、朝の光が差し込む部屋で、笑顔で迎えてくださった。

一面、緑に囲まれた葉山の高台にあるアトリエで

「この緑のきれいな作品にとりつかれてしまったんです」。鈴木竹柏さんが窓の外に目を向ける。一帯は空が見えないくらい緑色一色である。緑や薄緑、黄緑、美しい色彩の奏でるハーモニーを生み出す鈴木さんの日本画の世界が拡がっていた。

三浦半島西部に位置する葉山は海岸付近を除いては丘陵地が多い。非常に急な坂道を登り切った高台の場所に、緑に囲まれたご自宅とアトリエがある。坂の途中からは遠くに海が見える。急勾配の道の両脇には薄紫のあじさいがきれいに咲き誇っていた。

隣町の逗子の山の中に生まれ育ったという鈴木さんの父は逗子の助役を務め、たどれば祖先は平家の落人であったという。八人兄弟の末っ子として生を受けた。海と山のあるこの土地がとても気に入っていてずっと動くことはなかったそうである。子供の頃は山を越え一里を一時間かけて学校まで歩いて通った。急な坂道も、鈴木さんにとって子供の頃から慣れたものだったのだ。小学校五年の時に水彩画で描いた矢車草の絵を先生に褒められたことがきっかけで絵が好きになった。地元の逗子開成中学を卒業後、私立の美術学校に行こうと思っていたところに大きな転機が訪れた。

中村岳陵先生の内弟子として十二年間の厳しい修行を経て

一番上の兄が、その後師となる中村岳陵さんの家を建てた大工さんと知り合いだったというご縁から、中村先生にご指導いただくことになった。中村先生は四、五年前に東京から逗子へ越してみえていた。たまたま、中村先生のところに静岡から兄弟で弟子入りするはずの弟が身体を痛めてできなくなったので「ちょっと来てくれ」といわれ内弟子となった。結果、十二年間その家に住み込むことになる。

「内弟子というのは、たいへんで人には勧められない。家の中で毎日絵を描いているわけではなくて、雑用をするんです」

私立中学を出てすぐの、十九歳のときである。それまで末っ子として祖母からもかわいがられて、伸び伸び過ごしていたが、師の家に住み込みで、雑用ばかりをする日々が始まったのだ。防空壕を掘ったり、薪を運んだり、家にいたらすることがなかったかもしれないさまざまな仕事をした。厳しく慣れない住み込みで食糧事情も悪く、栄養失調から脚気になって足が上がらなくなってしまったのだ。そのため、二十歳になると徴兵検査があったが甲乙丙の丙と判断され軍隊に行かなくてよかったのである。今となってはよかったのである。

絵は教わるものではない。自分で考えて描く

先生は、教えてくれるということはなかった。だから自ら考えて学ぶ以外なかった。「絵は、あまり教えるもんではない。自分で考えてやらないと。自分で見て考えて、わからなくなったからすぐに先生に聞くのはだめですね」。身にしみて感じたことである。

外に出かけることもままならなかった。上野の展覧会を見に行っても寄り道せずにすぐ帰ってくるよ

Profile

1918年、神奈川県生まれ。逗子開成中学校卒。1936年、中村岳陵に師事。1962年、日展菊華賞。1981年、日展文部大臣賞。1987年、日本芸術院賞。1991年、日本芸術院会員。1994年、勲三等瑞宝章。2007年、文化功労者。現在、日本芸術院会員、日展顧問。

う厳しくいわれた。世の中のことがわからないまま、十二年が過ぎた。家に帰りたくても帰ることができなかった。写生できるのは裏庭などの狭い範囲。どんなものにも美を見いだして描いていた。

「制限があるなかでも裏庭の畑の植物を描いた二十代の作品は今見てもとてもよかったと思います」

厳しい師弟関係を辞めていく人もいたが、努力して何を描くのか自分で考えて行うことで地力がつく。たいへんな修業時代を経て、体力もついたし無駄ではなかった。若い人が手取足取り教えてもらっていたのでは、力がつかないのではないかと疑問を投げかける。今とは全く違う時代であった。

終戦の頃は、身体を痛めて横須賀の市立病院に入院していた。結核だった。「先生のところで防空壕を掘っていて、僕は土を運ぶ役目をしていた。木の車に乗っけて毎日運んでいたんです」。人手がないので、お手伝いさんもいなかった。当時は本当に食糧事情も悪かった。

昭和二十年には横須賀で空襲があり、危ないときもあった。逗子の山の根に中村先生の家はあったが、そこで空襲になった。ある夜庭に行って見ていると、頭のすぐ上を何かが飛んでいった。夜だからどこに落ちたかわからなかった。隣には狭い南瓜畑があったのだが、翌朝行ってみると、南瓜の葉が破けていてなんとそこに爆弾が落ちていたのだ。土が柔らかかったので、そのまま不発ですんだが、後に隣の息子が軍隊から帰ってきて話をすると「危ないから」といって撤去した。不発弾である。身近に起きた危機一髪の体験である。

戦後、院展から日展へ移る

師の中村さんが院展から戦後、日展へと移ったことを受けて、鈴木さんも院展から日展へと移ることになる。院展では三回入選した。戦後は一時自由で、院展日展どちらも出せた。

終戦から二、三年たって描き始めた。院展は落ちたり入ったりしていたが、日展では落ちることなく順調にいった。四、五回出して一回目は特選が十人で、二回目の時はわずか五人であった。しかも関西はなく、東京だけで五人が選ばれたのである。「その中に選ばれたので、それで元気が出ました」。本当に嬉しいできごとであった。二度目の特選の作品がとても印象に残っているという。

「当時の五山は山口蓬春さん、福田平八郎、中村岳陵、伊東深水、山川秀峰さんですかね。偉い先生の所にはそう行けない時代でした。山口先生は葉山に越してみえて、近いので、師に断ってから伺いました」

「今考えると日展に移って良かったです。五科あるので、いろんな科を見たり、工芸や洋画など好きなところに行ける。作家の交流もできました」

特選に二回入り、その後は無鑑査、委嘱、成績が良いと審査員というふうに進む。「審査員の一度目のときは上がってしまいましたね」。意外なお答えが返ってきた。審査は厳正な雰囲気の会場の中で行われた。

勉強していくうちに自然と個性というものが出てきます

どのようにして画風をつくってこられたのだろうか。「勉強していくうちに自然に個性というものができてきます。私の場合、最初はどうしても中村先生の画風に似ていましたが、そのうちに自分の個性が出てきました」。先生の所にいたときには外出できなかったが、自分で勉強したり外で写生したりして、独立してからは自由に出かけていって描いた。

しかし、個性は出ない人もいる。厳しいが、才能がない場合は、入選は何回もしても特選をとるのは難しく、才能のある人だけが不思議に伸びていく世界だと語る。「若い人を育てることは大事なことです。才能のある人が光っていきます。才能があって、努力することですね。昔も今も同じです」。長年、日展のトップとしてさまざまな作品をご覧になってのお言葉である。

「自然を見たり、古画の写真を見て勉強します。中国の絵や日本の古画の名画を見て参考にします。ただ、それを感じる人と感じない人がいますからね。西洋のものも色の具合を見たりします」

始終新鮮な気持ちで、絵が年をとらないように

絵を描く上で大切にされていることを尋ねた。

「百に近くなって、仕事が古くさくなっては困るんです。始終新鮮な気持ちを持たないと。長生きしてもうろくしたようなのではだめですから気をつけています。これは大事なことです。絵も年を取ってきては困りますからね。

こんなに長生きするとは思わなかったんですけど。僕は若い頃に結核をやって五十歳まで生きたら長生きと医者に言われたんです。五十になったらまだ元気でいたので大丈夫だと言われました。

今度百寿展というのをやるんです。高島屋で小さいのから三十点くらい出す予定です」

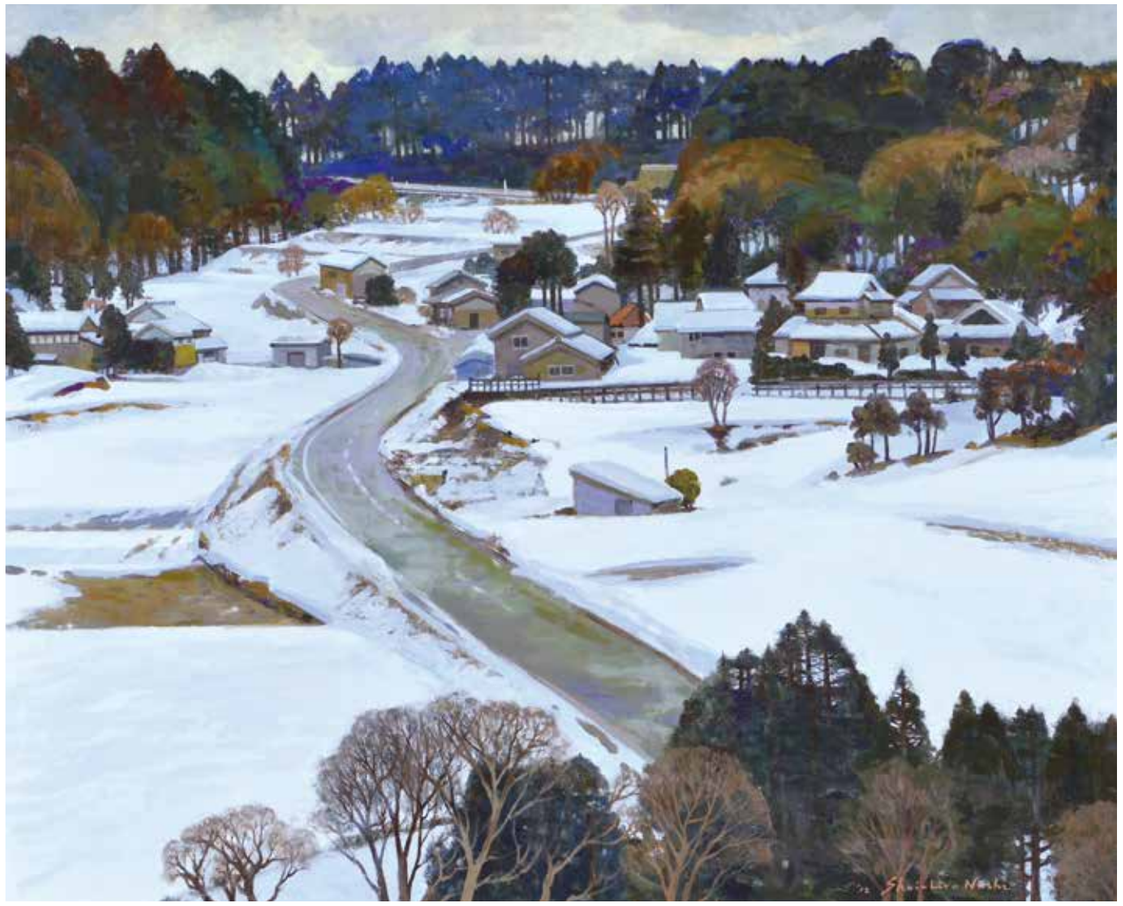
戦後食べるものもままならなかった激動の時代を元来の我慢強さと豊かな才能と努力によってくぐり抜け、また、逗子の山の中を歩き、自然豊かな中で生きてきたことすべてがよかったと振り返る。そして「絵が描けるから元気でいられます」。

緑の追求と水墨画への挑戦

「これからは、緑の追求と、水墨画を描いてみたいと思っています。水墨画は難しいですからね。勉強しないと」と意欲的である。毎日絵を描く。朝は五時に起きるとすぐに制作にかかり、七時まで集中して描いている。

毎年日展の制作は、秋に出品して、年明けから作品について構想を練り、六、七月には何を描くかを決めて八、九月に制作するという。「今年は緑の所にいると緑がきれいなもんですから、どうしてもちょっと濃い作品を出品すると思います。こういうこの色にひかれます。高台ですから、ここで描けるのは本当に幸せだと思います」

野 1965年 第八回日展



長坂雪景　２０１２年　第四十四回日展

03

芸術とは何か
創作とは何か

洋画家・日展顧問

塗師 祥一郎

Shoichirou Nushi

大宮駅から徒歩十五分ほどの閑静な住宅街。格子戸をくぐりぬけ、和風の佇まいのお宅へお邪魔した。日本の心の風景ともいえる雪景色を多く描いている塗師先生は、石川県小松の生まれである。

陶芸家の家に生まれて 小学校五年で油絵を。一五歳で入賞

小松に生まれ、その年に父親の仕事の関係で大宮へ引っ越した。父親はこの近くに窯を築き陶芸を生業としていた。油絵は小学校の担任の先生の影響で、小学校五年から描いていた。絵描きになりたかったという兵役から帰ってきた若い先生で、父の焼き物にも興味をもって家に遊びにみえ、かわいがってもらったという。戦時中で材料そのものがない時代。絵の具が足りないので質の良いペンキも調達してきて併用しながら油絵らしきものを描いていた。

大宮は終戦前に焼夷爆弾が落ちた程度で戦禍には遭わなかった。しかし母親が買い出しや過酷な日々から肺を悪くして結核になったことから故郷の小松に戻ることになった。一年ほどで金沢へ移る。

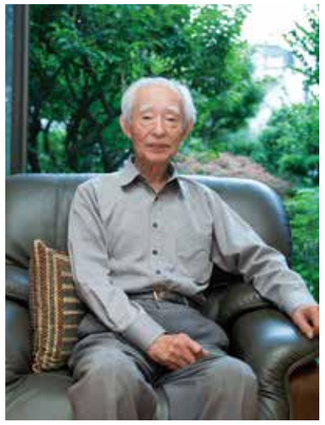
金沢の中学時代は学校が終わると自分で絵を勉強していた。「当時、終戦後はいろいろ進駐軍から物資が入ってきて、南京袋があったんです。麻のごつい袋でそれを伸ばしてキャンバスにして、自分なりに絵は描いていました」。そして石川県を中心とした現代美術展に応募して賞をとった。十五歳のできごとだ。

その後は金沢美術工芸専門学校という三年制の専門学校に進んだ。ちょうど入学するときに短大になった。「本当は東京に出て藝大受験したかったんですが、当時は四年生の大学は藝大と女子美だけで、あとは三年制の短大でした」。

日展初入選は大学三年で

「日展は昭和二十七年、大学三年のときに挑戦して、運良く入選しました。当時はそういうケースがわりとありました。今の若い人は、そう挑戦してくれないので寂しいですね」

初入選は、金沢の兼六園から町を見下ろした風景を描いた作品。その明くる年にある展覧会に挑戦した時は人物と風景と両方を出した。人物を出したのはその一回だけだった。というのも、「それでは日展に出してみようと言うことで学生時代に生意気な感じで人物をデフォルメしたような変な絵を描いて、大学の教授だった高光一也先生に見せたら『こんな絵出したってダメだよ。もっと素直になって出直し』と怒られました」。それで開き直って、キャンバスを公園に持ち込んで、現場で描いた。最初の年は五十号までだったため、写生をしてそれを教授に持っていくと、「これならいい。挑戦してみたら」ということで入選に結びついた。今はスケッチをして、アトリエ制作が主であるが、当時は、現場で当たり前のように描いていた。



Profile

1932年、石川県小松市生まれ。1953年、金沢美術工芸短大（現金沢美術工芸大）卒。小絲源太郎に師事。1952年、日展初入選、翌年には光風会初入選。1953年、光風会退会後、日洋展に参加。1971年、日展にて「村」が特選。1977年、日展会員となる。2003年、日本芸術院賞受賞。同年、日本芸術院会員。2008年、旭日中綬章受章。2010年から日洋会理事長。2015年、埼玉県立近代美術館で「未来に遺したい埼玉の風景ー塗師祥一郎展」を開催。現在、日本芸術院会員。日展顧問。日洋会理事長。

金沢美大で小絲先生との出会い。自由に話せる雰囲気

美大最後の年に、日展の小絲源太郎先生の集中講義があった。

卒業後、大宮へ戻ってから、先生との再会がある。

「たまたま友達に誘われて小絲先生が金沢に集中講義で行くという話で上野駅まで送りにいったんですね。そしたら『君は今どこにいるんだ』『大宮にいます』『絵を描いているの?』『もちろんです』『では家に遊びにおいでよ』ということで、後日田園調布の家をお訪ねすることになりました」

恐る恐る先生の所に遊びに行った。先生がいろいろお話しされて、アトリエに呼ばれた。

「途中の絵を見せて『この絵、どう思う?』と聞かれるのです。黙ってました。困ったと思って。すると『何にも言うことないなら帰れ』。それが第一日目の強烈な印象でした。このように、後々我々小絲門下の人は、先輩だろうが先生の絵だろうが意見を求められたら意見を言いあえる仲間のように育ってきたところに良さがあるのでしょう。自由に話せるんです。そういう意味では幸せでした」

日展落選をきっかけに教師を辞めて絵のみに専念

「日展は二回入り三回目落選で、四回目に入って、五、六回と続けて落選し、考え直しました。それからはずっと落選することなくきました」

大学を出てから大宮に来て何もしないわけにもいかず、教員になった。

「教員になってみたら、当時の校舎はベニヤでできていて環境が余り良くないので校長に頼んでペンキを買ってもらって掲示板に色を付けたりして、いい先生になりかかっていたんです。でも教員二年目になって日展に落ちて、これは絵を一生懸命やらなくてはだめだと反省し、思い切って教員を辞めてしまったんです。辞めて一年たったら、大宮で新たな高校の立ち上げがあり、一年間だけ非常勤講師で勤め、合計三年です。そこで辞めたから良かったんです。日展を落ちた結果、それから努力をしていったわけで。その時は独り身だったので餓死することはないやというような、余計気楽にできたんだと思うんです。絵に専念したいという気持ちが強かったんですね」

転機となる雪景色を描いて

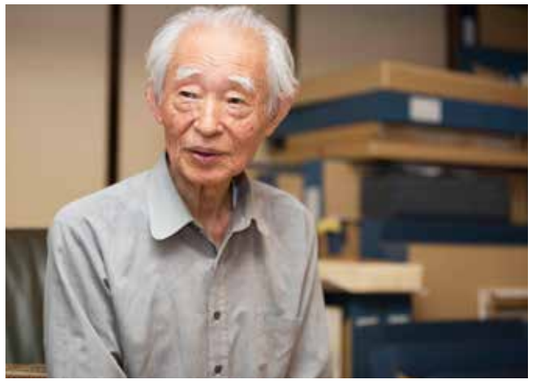
街・工場・採土場などをモチーフに五年ほどの周期で制作していた。特選は十年ほど経って、会津の雪景色の作品だった。雪景色を描き出して四十五年になる。そのきっかけはある旅に始まる。

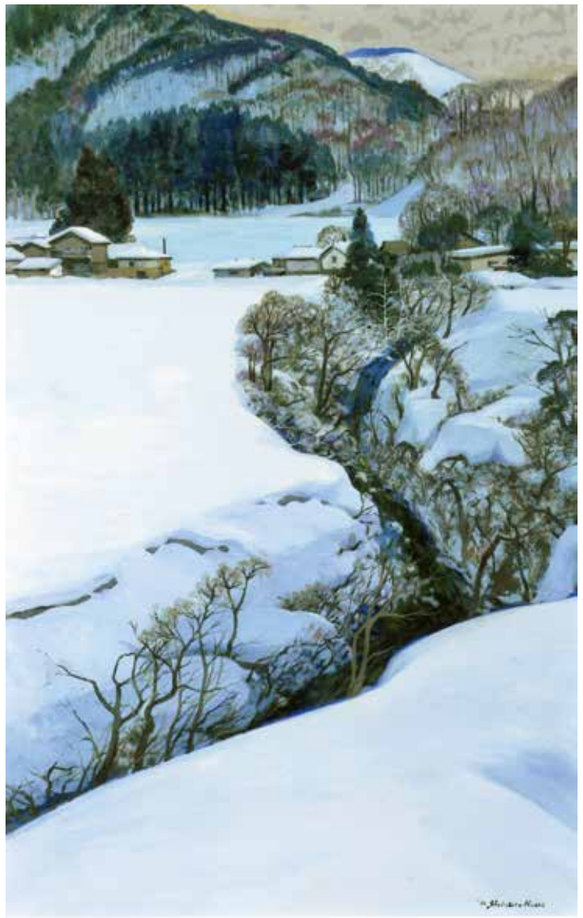
初入選から十余年、制作に行き詰まりを感じたことから会津へと旅に出た。三十五歳の時だ。途中下車を繰り返しながらゆっくりと何を求める目的もなく、スケッチブックを手に歩いた。

久しぶりの雪国で、白一色、越後平野の畔に建ち並ぶ稲架掛けの榛の木が印象的に目にうつる。三条駅で下車、木々の姿をスケッチし、雪の中を歩き回った。その時の感動は今も忘れられないという。今はもう見ることができない光景。そのあと阿賀野川流域の風景、会津の里であった山里の民家や雪山、落葉樹林の魅力に感動。雪によって生まれた造形に魅了されたのだ。

それが転機になった。今まで感じなかった雪の面白さをひしひしと感じた。

「雪のつくりだす色面、空間が絵作りの中で非常に面白く効果として出せると思い、絵作りの中で雪を利用するのが最初でしたが、雪の中を歩いて行くと雪の中の生活をある程度体験しているので、その思い入れが入ってきて、雪の中にどっぷりつかってしまったというのが現実なんです」





山形 2016年 第三十回記念 日洋展

自然の風景に感じられるようには描くが、画面の構成を意識しながら描いている。それまで、造形的なことをいろいろ研鑽してきたものをベースに山や雪原を構成している。

風景を描く場合、天候との兼ね合いがあり、がっかりすることもかなり多いという。しかし「白を描くのはけっこう楽しいんです」とにっこり。

「歩いているときが一番嬉しいんですね。探すときが楽しいです。会津、那須高原、埼玉。年に何度か雪が降ると出かけます。金沢にいるときは雪は嫌でしょうがなかった。関東では雪が降ると嬉しくて雪合戦をやりますが、毎日雪とみぞれの暮らしだと嫌になり、金沢時代に雪景色を描いたのは十号一枚ぐらいで、雪なんか描くとも思っていなかった」

人生とはわからないものだ。しかし、幼いころの体験は心の中で雪国の雪のように積み重なっていた。

風景画の醍醐味

その風景をどのように絵にしていくか。風景を見つけることも大事だが、その顔も天候や時間によって変わり、いろいろな表情を見せてくれる。時間や季節をどこで固定させるかが非常に大事だと語る。

「最も美しい情景を描きあげられれば良いのだが、時にはこの風景はこう縮めたほうが緊迫感が出る。また伸ばした方が広がりが出てきたり、手前の広がりを大きく見せることができることもある。枯れた木をとってしまったり、ある程度風景をいじって自分なりに表現したい形にもっていくこともできるわけですね。一つの風景でも季節と時間でずいぶん変わるのでそのときの出会いにうまく結びついてくれると自分で想像できなかったものが見えてくる、それは風景を描いていくなかで楽しみでもあります」

最後まで日本の風景にこだわる

若い人へのアドバイスを伺うと「若い時はがむしゃらに進んで行くことが大事だと思うんです。理屈で考えていくとどうしても絵が沈んできてしまう。だから向かっていく姿勢を大事にし、反面、常に古典のものをしっかり見ていくこと。そこには必ずいろいろ教えてくれるものがあります」。ヨーロッパに初めて行ったとき、憧れていた作家の作品と同じ風景が現実にあり、正直に描いているんだとわかった。それを感じたとたん、「やっぱりおれは日本の風景を描こう」と強く思ったという。

「最後まで日本の風景にこだわっていきたいと思うんですが、できるだけ風景を省略化するというか、風景のエキスみたいなものが表現できればという気持ちでいます。なかなかそこにたどりつけるかどうかわかりませんが。そこに、日本の美というものもあると思うし、そうしたいと願っているのです」

芸術とは何か
創作とは何か

04

彫刻家・日展顧問

中村晋也

Shinya Nakamura

羅睺羅　2011年　第四十三回日展

釈迦八相像

鹿児島空港から車で一時間ほど、鹿児島市郊外に中村晋也美術館はある。彫刻ひとすじに七〇年あまり。今年九十歳を迎える中村晋也さんを美術館に訪ねた。薬師寺に奉納された釈迦八相像の原型や、大きな騎馬像など、美術館のなかには毎年作品が増えている。今も釈迦八相像の残り四面は二年後の完成を目指して制作中という。館長室で窓からの光を背にして穏やかな表情で座る中村さんの姿は、後光が射す釈迦像のようにも見えた。

戦後の苦しみを乗り越えて

中村さんは、三重県亀山市に生まれ、神戸中学校を経て東京高等師範学校に進む。彫刻とはその時に出会った。「その頃は、金もなければ食べる物もない本当にひどい時代で、よくみんな生き延びたもんだと思います。でも戦後の苦しみは否応なしにみんな乗り越えられた。かなり厳しいことがあっても私たち以上の年代の人は文句を言わない。苦しいことは何でも受け入れられる。そういう訓練ができた時代だと思う。自分のこともですが、人様のことも一生懸命考える時代でした」。

粘土さえあれば何度でも修練できる

彫刻を始めたきっかけはその時代背景にあるという。「最初は絵をやるつもりでした。でも、その頃は食べるのが先で、絵の具を買うなんてとんでもないことです。絵の具って高いんです。それにキャンバスも買わなければ。そんなことに金を使うなら、粘土さえあれば自分の修練をするためには何度でもできるわけです。それがきっかけです。やっぱり人間は最高に追い詰められるといろんなことを勉強するものです。ですからいい時代だったなと思います」。

学生時代には兵隊に行くことになる。

昨日までいた人がいなくなる戦争

「昨日までいた人がいなくなるのが戦争です。国内では空襲で、離れて見ると天が焦げて見える。叫び声が今でも耳に残っています。戦争に行く前の三日間くらい、『おまえは軍隊に行くんだから出てこなくていいからここに入ってなさい』と親が言いまして、家で掘った防空壕に入っていました。四日市が近いのですが、『あそこの赤いのは何だろう』、『焼けている』。そういうのが毎日です。戦争の中にいるとこっちも必死ですから辛いとか苦しいとか全然感じない。そんなことはみんな超越している。だから感覚的にひとつの浮遊物体といいましょうか。暑くもなければ痛くもなければ何でもない。感覚が麻痺したなかで昼も夜も空気を吸いながら泳いでいる。そういう感じですね。あのときに生き延びなかった人たちは、今考えれば悔しいだろうなと思いますね」

戦争から帰ってきて、大学に戻るために、いつ着くかわからない東京行きの汽車に乗った。車内は窓ガラスが割れているため板張りだ。「板張りに誰がしたのか見えぬ富士」名古屋駅から乗った汽車の板張りに書かれたその言葉を心に刻みながら、暗い車内で新聞紙を敷いてどこにでも座った。棚の上や列車の上に乗る強者までいたが誰もとがめなかった。静岡から東京まで四時間。どんなことでもありがたいと感じる時代だった。

吉田三郎先生を訪ねて手ほどきを受ける

戦争が終わった後、また勉強を再開。吉田三郎先生と出会い、彫刻の手ほどきを受けることになる。

ある日、大学の研究室のそばを通ったときに「彫刻の吉田先生はいい先生だから」と話している声を耳にした。思い立ってすぐに先生の住所をつきとめた。「田端にいらっしゃるという番地を頼りに手ぶ

Profile

1926年、三重県亀山市出身。東京高等師範学校卒。1949年、鹿児島大学講師となり、かたわら彫刻制作をする。1966年、フランス留学。1972年、鹿児島大学教授。1984年、日展文部大臣賞受賞、1988年、日本芸術院賞受賞、1989年、日本芸術院会員、1992年、鹿児島大学退官、名誉教授となる。1994年、日本彫刻会理事長となる。1996年、中村晋也美術館を鹿児島県松元町（現鹿児島市石谷町）に設立。1999年、勲三等旭日中綬章受章。2002年、紺綬褒章受章、文化功労者、2007年、文化勲章受章。2008年、筑波大学名誉博士。2009年、崇城大学名誉学長。2010年、亀山市名誉市民。2014年、鹿児島市名誉市民。現在、日本芸術院会員、日展顧問。

らで堂々と『ごめんください』って。戦後すぐですから、どの家も食べるのが精一杯。吉田先生もそうで、バラックみたいな所で。これがアトリエかときょときょとと眺めて『先生、彫刻を教えてくれませんか』と、堂々と言って話し込んだことを覚えています」。卒業できなくてもいいと開きなおって、大学の授業はあまり出ずに、吉田先生のもとで学ぶ日々が始まった。

卒業時には文部省の辞令で、新設された鹿児島大学の文部教官に指名され鹿児島に赴任する。

そこで、出会った同い年の家政科の先生と結婚。初めは三年くらいで替わると思っていたのがずっと鹿児島で教鞭を執りながら制作活動を行うことになった。

フランスの彫刻家、詩人アペルとの出会い

四十歳のときから、二回にわたってフランスに留学。アペル・フェノサという彫刻家と出会う。これも転機となった。フランスでは視野が広まり考えが広くなるのを感じた。「自分のなかに新しい自分を発見するというと大げさに聞こえるかもしれませんが、自分が気づいていなかったことを自然から教えられるということを、海外で身をもって体験したということかもしれません。フェノサは半分詩人みたいでした。ピカソの弟子なもんですから、『彫刻というのは詩でなければいけない』と本人がよく言っていましたので、わからないながら自分の中に少しずつ定着していったような気がしております」。

一九七九年には鹿児島市中心部に大久保利通像を制作し、その名が一躍広まった。

一点一点が次につながるように、自分自身が覚悟して作るかどうか

彫刻に対しての考え方は、「今でも勉強ですから、彫刻をいつ勉強したかというのはないのですが、一点一点がその次につながるように、自分自身が覚悟して作るかどうかだと思うんです」。

制作に終わりというものはない。型をとる直前まで真剣に続け、「いつまでも一生でも作品をいじっていたいです」と語る。

若い彫刻家に対しては「若い方々がどんな考えを持っているかわかりません。先取りしてこういう時代だからこう行くという若者は、それはそれで立派だと思う。

昔なら丁稚奉公に入って表の庭掃除からやれとか小僧修行からですが、今はそういうことはなかなかないと思います。その時代に生きた背景があるからいつの時代がすばらしかったとは言えないかもしれません。若い人は非常にお利口さんです。先生方も昔のようにぶっきらぼうではなくて親切な方がたくさんいらっしゃいますので、いずれにしてもその人が一人前になるように、いろんな方向を大先輩たちはいろいろと考えてくださるのではないでしょうか」。

豊臣秀吉公像

ストレートに相手に入ってくる造形

これまで数々の戦没者慰霊碑も作った。戦後すぐにはそうしたことをする気持ちになれなかったが戦後十五年ほどたったときに二十カ所ほど作った。制作にあたりいろいろな慰霊碑を見て回ったが、沖縄で出会った「魂魄の塔」は何の飾りもなく文字が書かれただけの石碑で忘れられないという。「ものごととはばっとストレートに相手に入ってくる造形ができれば勝ちなんです」。

祈りの像「ミゼレーレ」

その表現がストレートに伝わり多くの人の心を打った作品の代表ともいえるのが、神戸の大震災をきっかけに作られた祈りを捧げる像「ミゼレーレ」ではないだろうか。フランスに留学していた頃から宗教的なものに関心があったという。

「何でもそうですが、世の中は予想内と予想外と大きく二つに分けられると思います。予想外のことはそのときになってみてこれで人間よく耐えたなというのがあります。やはりそこには神様か仏様かは別として大自然からのお助けがあったのだなと、それが私にミゼレーレの仕事をさせる根本になっていました」

千年以上残る仕事を

二〇一五年六月、釈迦八相像のうち四面のブロンズ像が完成し、薬師寺西塔に納めた。釈迦が悟りを開いた成道。右手を軽く地面にふれ大地の女神を呼び寄せた場面をはじめ、四場面である。制作は、構想から十年かけて取り組む大プロジェクトである。

「釈迦の八相は仏教のなかで手順や物語が構築されていますが、釈迦というのは真ん中にいらっしゃってどこからでも眺めることができます。後ろ姿がきれいという人と正面、横がいいと見方が違ってくる。自分はどういうお釈迦様を引き出して表現するか、それが基本的な姿になるだろうと思います。よく、我々はその人の身になってとか、その人の感情を入れてとか言いますがなかなかできないことなんです。ただお釈迦様は何千年も昔の話なので、皆さんが研究なさった本から教えていただいて構成をしていくということになると思います」

そしてこの仕事は今から千年後も残る。「もっと残る。ずっと残るだろうというのは、やっぱり怖いです。怖いから緊張感があるのかもしれません」。常に覚悟して制作に臨む。

ミゼレーレ

次のテーマに挑む

次の仕事は、歴史物を考えている。「仕事をして、勉強させていただく。一生懸命にもう一度中学生になったように歴史の勉強から始めてみたりいたします。今度は日本武尊（やまとたけるのみこと）、弟橘媛（おとたちばなひめ）あの付近に話を転じます。物語は上手に作ってあって、弟橘媛が海の中にざぶーんと入っていったらあっという間に波が静まる。弟橘媛は海に入水して、どんな気持ちだったのだろう、どうやってあの船の舳先から飛び込めたのだろう、そのときにどんな顔をしていたのだろう、船の淵に足をかけて飛び込むだろうか、この人泳げないんだろうかとか考え出すと楽しいというか辛いというか、想いがつきないんです」。次々と沸き起こる想像のシーン。中村さんの瞳は輝いている。

悠々 2014年 改組 新 第一回日展

芸術とは何か 創作とは何か

05

漆芸家・日展顧問

三谷 吾一

Goichi Mitani

「輪島で三谷先生を知らない人はいませんよ。実は私も伝統工芸保存会の職人なんです。」

行き先を告げて能登空港から乗ったタクシーの運転手さんの第一声である。

緑に囲まれた一本道を抜けて二十分ほど、輪島市内に入ると、

輪島塗美術館の看板や、道の駅、輪島塗の店があちこちに見えてくる。

駅前通りを少し入った静かな住宅街にある三谷先生のお宅にうかがった。

小学校六年で沈金師前大峰氏との出会い

お孫さんのご案内を受けて二階のアトリエに上がると、やさしい笑顔で迎えてくださり、上品な物腰でお話を始めてくださった。「輪島は塗りの町ですから、仕事は輪島塗り関係の職人がほとんどだったんです。嫌な人はよそに行くしかなかったんです」。そうした時代、大正八年に輪島に生まれた三谷吾一さんが、小学校六年生のときのことだ。輪島の沈金師前大峰さんが昭和五年の帝展で特選をとられて小学校で講演会を行った。その話を聞いて大いに感銘を受け、塗師の家に生まれた自分も作家として特選がとれるようになりたいと強く思った。それが出発点だった。そのときの志をずっと貫き通して今日まできた。小学校六年生のときに一生の仕事を決めたのである。しかし、その道のりは決して平坦なものではなかった。

十四歳で蕨舞洲氏に弟子入り

絵が好きで、小学校で賞をとるほどの画才を発揮した三谷さんは、輪島塗りの職人の木地作りから始まり下地、塗りなどのさまざまな工程のなかでも、加飾を、そのなかでも華やかな蒔絵ではなく、沈金の道を選んだ。半年から一年かけて何層にも塗り重ねられた輪島塗りの漆塗の面に、鑿風の刀で文様を彫りつけ、これに漆を擦り込んで、金箔や金粉を刀痕内に押し込んで文様を表す技法である。「沈金は比較的安価にできたんです」。高等小学校の高等科を卒業すると、十四歳にして、自分の布団を持参して住み込みで沈金師蕨舞洲氏の徒弟に入った。家はご近所ではあったが、親元を離れ、十月～三月の繁忙期は夜も仕事をすることがあった。その修業は仕事だけではなかった。挨拶の仕方からお茶の出し方、お客様への対応の仕方など、社会人としての心得を教えこまれる厳しいものであった。

十九歳から前大峰氏のもとで修行。二十三歳で独立

こうして五年の徒弟を終えたあと、舞洲氏と兄弟弟子関係にある前大峰氏のもとでさらに修行を重ねた。

昭和十五年に紀元2600年奉祝美術展が東京都美術館で開催され、初めて、着物に下駄の出で立ちで東京の文展にでかけていった。二十一歳のときである。作品の多さにびっくりした印象があったという。昭和十六年、沈金師として独立する。

昭和十七年、いよいよ日本は戦争のさなかであったがこのとき二十三歳で二度目の東京へでかけている。第五回新文展に出品の「沈金漆筥」が初入選。アヤメの花を描いた手箱である。

戦時中は、なんとか輪島を離れずに仕事を続けたかったために志願して軍需工場に勤めながら制作を続けた。昭和十八年は落選だった。昭和十九年、戦火は激しくなっていく。

戦後の苦しい二十年間

二十六歳で終戦を迎え、翌二十一年には新文展から名前を改め日展となり、春と秋の二回行うことになった。そして秋には入選を果たす。

しかし、ここからは、自分の想いを制作していきたいと言うことでスランプに陥り連続して落選するということもあり、成果が上がらず苦しい時代に

Profile

1919年石川県輪島町(現輪島市)に生まれる。33年、沈金師・蕨舞洲に師事。38年、前大峰に師事、41年、沈金職人として独立。42年、新文展初入選。65年、日本現代工芸美術展現代工芸大賞・読売新聞社賞受賞。66、70年、日展特選北斗賞受賞、78年、日展会員賞受賞、88年、日本芸術院賞受賞、2002年、日本芸術院会員となる。2015年、文化功労者。現在、日本芸術院会員、日展顧問、現代工芸美術家協会常任顧問。

なった。

終戦直後の混乱期には東京芸大出身の吉田丈夫氏、三輪智一氏が輪島に疎開されており、その折に若い作家が、図案の作り方や考え方など、多くのことを学ぶ機会を得たという。

四十六歳で現代工芸大賞。翌年日展の特選受賞

二十年もの苦しい時代を経て認められたのは昭和四十年、四十六歳のとき、第四回日本現代工芸美術展で「飛翔」が現代工芸大賞・グランプリを受賞したのである。そして翌年の第九回日展で「集」が特選に選ばれた。十四歳のときに憧れた恩師前大峰と同じ特選を受賞したのだ。それまでの作品づくりはスランプと、経済的にも厳しく、たいへん辛い日々であった。戦後のものがない時代、しかし歯をくいしばり、自分の考える作品を作り続けてきた。

結婚したのは二十八くらいで遅かったが、それは、結婚すると仕事ができなくなるという考えがあったことによるという。周囲の反対もあったが結婚し、「女房の支えがあったから乗り越えることができたんです」。どんなときでもいつでも応援してくれた奥様は昨年、他界され、いまはお孫さんが食事を用意してくださるそうだ。

毎年違うものを、少しでもいいものに挑戦

作品制作にあたっての根本的な考え方は「毎年違う物をつくりたいんです。少しでもいいものをと思って挑戦し、失敗することもある。でも失敗が勉強になる。仕事はその積み重ねなんです。一つ一つ勉強して前に進むんです」。穏やかな面持ちのなかにそうして前向きにまっすぐ進んでいらした強い意志。十四歳から八十三年間にわたって漆と向き合ってこられたわけである。真っ白なさらさらの髪の毛につやつやした肌。瞳がきらきらと輝いている。

「金の上にプラチナを乗せて漆で抑えて、エルジー粉、パール粉で微妙な色を出す、この方法を主体に行っている。これは私が初めてつくったものです」

これは、三谷さんの作品がもつ独特の美しい色彩の秘密である。黒地に金ではなく、プラチナ箔や色のついた粉を使うことで、柔らかな色調と細かな濃淡の調子を実現した。

沈金一筋に歩みながら、三谷さんの作風は、伝統的な輪島塗の絵や意匠とは全く異なり、師の大峰氏の作風とも異なるものであった。

「職人に大切なのは、考え方と技術ですが、私の場合はまず考え方を優先させて、そこに技術をもっていく。でも伝統工芸というのは技術優先で進むことが多いんです」。技術に考えを合わせていくやりかたである。しかし、まず構想があって、それをどう技術で折り合いをつけていくか。三谷さんは常に作品のことを考えて考えて、新しいものを生み出そうとしている。そこが作品に大きな違いを生んでいる。

黄昏 2015
改組 新 第二回日展

また三谷作品の特徴は細かな点彫りにある。点で彫っていく。そこには深い、浅い、間隔をあける、つめて彫るなどによって、柔らかい、堅いのさまざまな表現の違いができてくる。印刷がドットでできているのと同じ手法を彫りで進めているということだ。気が遠くなるような細かな手仕事である。

独特の美しい色彩と点彫りの抒情詩

隣の畳の部屋のアトリエに伺うと、現在制作中の細かな点彫り作品を披露してくださった。輪島塗りの漆器は、木型に布をまいて漆を何層にもかけてかけてという柔らかなあたたかみを感じさせる器である。その上に細かな細かな絵柄をのみで彫って、そこに金箔などを埋め込んでいく。

グランプリを取ってからは、本格的にこの点彫りを進めてきた。「細かいものはこのめがねをかけてみるんですよ」と笑う。

発想の元になるのは、絵本が多いという。もともと絵が好きで入った道。油絵を描きたいと思ったこともあるという。作家では特にクレーが好きで画集もいろいろ持っている。いろいろな作品を見てそれを自分のなかに取り込んでそれから発想する。「漆の手法で絵を描いているんですね」。

花や蝶、鳥、うさぎやきつねなどの動物たち、空、雲、月など。優美な姿が点彫りで描き出されていく。作品のなかには、三谷さんの穏やかな優しさが表れているように感じられた。

長男の三谷慎さんは造形大を出て彫刻家になり、イタリアに十一年滞在した後、輪島の伝統とイタリアの伝統を組み合わせたモダンな、しかし父親の芸術との共通点を持つ作品を作られている。二人展をときどき東京でも行われているという。

終始、優しい笑顔できらきらと瞳を輝かせておだやかにお話しくださった。戦後の苦しい時期を乗り越えて、しかし、そうした時期があったからこそ、と振り返って「この年まで健康で作品をつくることができて幸せなことです。好きなことをしているから、誰にも指図されることなくできているから長生きできているのかもしれませんね」。

畳のアトリエとロフトのような木のぬくもりのある応接に大きなアンプと天井にスピーカーが設置されている。息子さんがイタリアから運んできたという。「こういう仕事を一日中しているとやっぱり音楽を聴くんですね」。ゆったりとした時間が流れているのを感じた。

作品を通して人間の考え方を作る

日展について伺うと、「人材を育てること、いい人を見つけてバックアップすることが大切と思います。審査員が育てていかなくてはね。若い作家でこびたくないとか反発する人のほうが優秀だったりすることもあるから、そうしたいい人を潰してしまわず、探して育てることですね」。

若い人へのアドバイスを尋ねると、少し間を置いて、「これは本人のやる気の問題ですね。作家としての考え方ができていること。そしてやる気があること、叩かれても叩かれても根性がないとね。作品を通して人間の考え方をつくるということですね」。

徒弟時代に休みというのはお盆と正月とお祭りのときしかなかったという。それが普通だった。だから今みたいな休みにはなかなか慣れることができなかったと語る。

「グランプリをとってから、ずっと休むことなく五十年作り続けてこられたのは、奇跡のようなもんです。人によっては病気したり、家の事情でできなかったりしますから、私は幸せでした」

今後の抱負をうかがうと、「今後は、年に一点いいものを、力を入れて作っていきたいと思っています。もう日展のみに絞りましたので、いいものを、そして常に違ったものに挑戦していきたいんです。好きなことをしているので、ストレスもなく、できているのは本当に幸せです」。

独立してから七十五年という長い年月に作られた作品の数々には、常にいつも新たな物を作ろうとする姿勢が貫かれている。伝統工芸の世界にあって、常に新たな色彩と構成で、抒情的な作風をもつ、この作家の限りない創造の源を垣間見せていただいた。

06

芸術とは何か
創作とは何か

書家・日展顧問

日比野光鳳

Kouhou Hibino

三日月 1997年
第二十九回日展
内閣総理大臣賞受賞作

京都市左京区下鴨神社にほど近い、京都の伝統を感じる趣のある邸宅を訪れた。昭和の三筆と言われた亡き父親の日比野五鳳さん、光鳳さん、そしてご子息の実さんと三代続く京都の書家の家である。二階にご案内いただくと、広い和室の奥で、筆や硯が並ぶ机の前で着物姿の先生が迎えてくださった。今年八十七歳の書家に話をうかがった。

京都の書家の家に生まれて。一般企業に十二年の後に書の道へ

日比野光鳳さんは、京都に生まれ、五歳の頃から父である日比野五鳳氏のもとで書を習っていた。大学は経済学部を卒業し、その後一般企業で十二年の経験を積んでいる。経理九年、秘書課長を三年勤めた。実社会では、人間関係や組織のあり方などを学びその経験が役立ってきたという。芸術家といっても、作品と向き合うばかりが仕事ではなく、ビジネスの面もある。

「正式には三十六歳から日展を始めました。それは遅かったにしても私は五、六歳から書をやっています。日展を舞台にして一般の入選から始めて、特選を二回いただいて無鑑査、委嘱、審査員をやって、審査員を三回すると評議員、芸術院賞をいただいて理事、そして芸術院会員、八十で定年ですから、今は日展顧問です。今一番思うのは月日の経つのは早い。気持ちは五十代六十代ですがいつのまにか八十七歳です。筆を持って頭脳と手を使うので長生きしますね。書を勉強し、人にものを教えるということも大事なことです。たくさんのお弟子がいて、常に反省しながらやってきているのですが、たぶん死ぬまで満足な書は書けませんね。だんだん理想が上にあがりますでしょ。」

三十代は、書作家として、書の基本を学び直すことと同時に父の指導で、少しずつ作品を発表し始めて、一九六七年、三十八歳の時に初入選。日展に向けて、今ある力を全力投入するという気持ちは、今もずっと持ち続けている。

四十代で、母校である同志社大学文学部の非常勤講師となり、後進の育成に務めた。京都御所の北側の建物で教壇に立った時のことを書物の中で「私は教室の隣家である冷泉家の屋根を見ながら、日本文化の和歌を育んできた、まさにその場所にいることに嬉しさがこみ上げて身も震える思いを味わいました」と語っている。その後も長らく、近隣のいくつかの大学で教鞭を執っている。

Profile

1928年、京都市生まれ。1953年、同志社大学経済学部卒業。幼少より父・日比野五鳳に師事。1967年、日展初入選。1971年、同志社大学文学部非常勤講師（平成四年まで）。1975年、日展特選受賞。1977年、京都府立大学文学部・大阪女子大学文学部非常勤講師（1979年まで）。1978年、日展特選受賞、1983年、日展審査員。1985年、書道水穂会会長。1986年、紺綬褒章受章（以後28回受章）。1987年、日展会員賞受賞。1989年、龍谷大学文学部非常勤講師（2007年まで）。1992年、京都府文化賞功労賞受賞。1997年、日展内閣総理大臣賞受賞。1999年、日本芸術院賞受賞。日展理事。2002年、日展常務理事。花園大学文学部客員教授。2004年、旭日小綬章受章。2007年、龍谷大学文学部客員教授。2008年、日本芸術院会員。2009年、日展顧問。2010年、京都新聞大賞文化学術賞受賞。2011年、文化功労者顕彰。現在、日本芸術院会員、日展顧問、読売書法会最高顧問、日本書芸院最高顧問、全日本書道連盟名誉顧問、全国書美術振興会名誉顧問、京都書作家協会名誉顧問、京都文化財団評議員、書道水穂会会長、日比野五鳳記念美術館名誉館長。

京都で生まれた古今和歌集や新古今和歌集を

書は、言葉を書くもの。仮名書の場合、日本語の和歌や短歌、俳句を主に選ぶ。詩文の選定や選歌の過程で、書く言葉にも気を遣う。良い歌に出会うと、書くのも楽しさが増すという。

「万葉集や古今和歌集、新古今和歌集を常に読んでいます。昔、日展を始めたころは万葉集の歌を選んで書いて、やがて古今和歌集です。最近は年がいったので新古今和歌集の恋の歌や春夏秋冬の歌を中心に。それから近現代の作家で正岡子規から始まって島木赤彦など。それぞれすばらしいです。

特に季節の歌がよろしいです。春夏秋冬、日本の四季の変化を歌ったもの。古今も新古今もできたのは京都ですから京都に生まれ育った私がそれを題材にするのがいいと思って、いまは新古今を中心にやっています」。今年の日展作品は新古今集から選んで書かれるとのことである。

今の時代に合わせたスタイルで表現する

しかし、昔の歌をそのまま書くのではない。

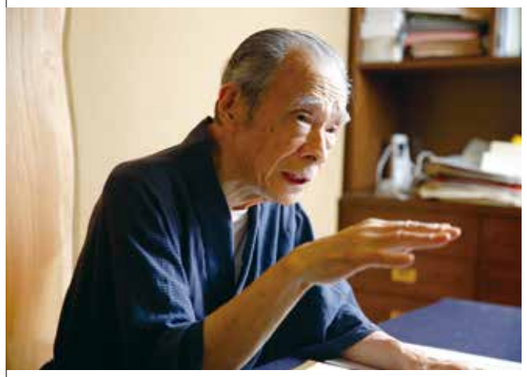
「これからは、変体仮名を使わないで、現代の歌を芸術的に表現する。仮名ではちらしというのですが、構成を今の時代に合わせていかに新しいスタイルにしていくか。明治以来大正時代に出た有名な作家と同じ作品を書いていては現代を語れません。現代の二〇一六年の作家が書いたということを表現したいと思います」

京都の風土に加えて作家の現代性をうまく合致させ、気品ある雅の世界の書を考えて制作する。

「京都には「はんなり」という言葉があって、品があって控えめで、それでいて、なにか少し華やかなモノや人を、そう言います。書の作品には、なによりも強い部分や迫力ある部分が必要と考える作家も多いですが、私は上品で華やかなもの、はんなりした世界を志向する作家だと言えます」

広い机一面に、淡い色合いで日本古来の美しい紙を広げる。扇形や正方形、横長など、形もさまざまである。仮名書はこうした紙に書くのも特徴である。

「書には硯、墨、筆、紙の四つが必要です。言うは易しで行うは難しいですが、料紙といわれるきれいな紙に四、五枚書いて、書けるときもあれば百枚書いても書けないこともあります」



京都で生まれた仮名書道を引き継いで

「一二〇〇年前に漢字をもとに仮名が生まれたのが京都です。私は現代の京都に生まれ育って仮名を学んでいますから、仮名を発明した歴史を考えながら、広い日本の中でも京都に生まれたこと、特に私はその点を強調していきたい。仮名は京都でやることに意味がある。この地で仮名書を伝えていかなければならないと思っています。父五鳳も同じ思いでこの京都でがんばってきたと思います」

日比野さんの言葉に力がはいる。

「日本は紀元前に中国から伝わった漢字の音を借りて、日本の風土に合わせて独自の仮名を作りました。七九四年に都が京都に移り現在の仮名が完成します。万葉仮名はまず草仮名になり、それがより洗練されて、現在のひらがなになります。九〇五年に最初の勅撰和歌集「古今集」が仮名文字で書かれ、日本文化の大事な要素となりました。紫式部が源氏物語を書いた頃は、男女関係なく仮名を使うようになりました。この日本独自の文化を創ってきたのが京都です。仮名文字がなければ日本文字もなく、和歌も俳句も発展しなかったでしょう。日本文化の基礎そのものが仮名書なのです」

近年、春夏秋冬の書を京都の迎賓館に納めた。茶室もあり、畳の部屋に外国人をご案内するときの掛け軸は仮名書であるという。

日本において大切な書という芸術

「書という芸術は日本において非常に大事なもの

の一つです。小学校か中学校の生徒がお習字を習います。高校、大学で書道、その上に立って芸術的な書、日展を舞台にした芸術的な書を志向していく日展の作家、書家とこうなるわけで、月日がかかります。しかし、ごはんを食べるときの箸と同じように筆も使えるはずです。日本人は筆を使います。箸をもっている人は誰でも筆を使うのも上手になります」

そして、日本人としての生き方にも触れる。

「日本人である以上、何事も美しくありたい。自分の書く字も美しくありたいものです」

公平で誰もが認める団体に

長年活躍されている日展についてお尋ねした。

「日展のことをまったくご存じない方でない限り、おおかたの人にとって日展は日本の美術の最高峰と考えてくださるはずです。私も初めて審査員となった時に、『日展の審査員です』と言うと、かなり大きな反響がありました。いまはそれ程でもないかと思いますが、当時はすごかったです。ゆえに、日展に身を置くことは、自分が一番価値あるところにいるということですから、多くの門人を日展に出品させつつ、自分もまた、日展でその年一番の作品を発表することが、最も大切な仕事だと考えています。

この三年、日展には逆風が吹きました。それも、第五科「書」の部門の醜聞でしたから、第五科の一人として皆様にはお詫び申したいです。しかし、それゆえに、公平で誰もが認める団体に変わることが出来たのは良かったとも思います。しばらくすると、本当に能力のある作家が、日展に吸い寄せられ、しだいに増えていくのではないかと思うと、今後に期待が持てますね。今後は機会があれば次の世代を集めて五科それぞれで次を背負う新人にも光をあててほしいです」

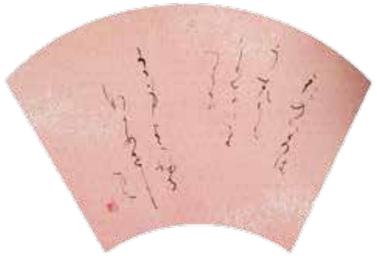
繰り返し毎年見ていただく日展

「日展はそれぞれの作家が永年積み上げてきた技術や感性をお目に掛ける展覧会ですから、ご覧になる方は、作家名とその作家の作品の傾向を覚えていっていただけるといいでしょう。

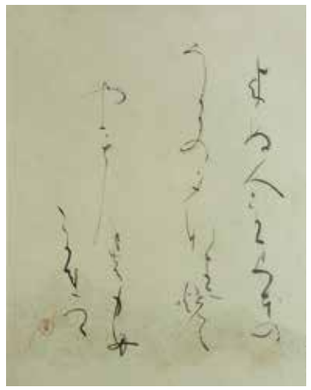
観光地でも初めて行って楽しめるところと、何度も足を運ぶうちに楽しさがわかるところがあるように、日展は、繰り返し毎年見るうちにわかるようになる。この作家の今年の作品はいいなあとか、この作家なにか新しいことを始めたんだなとかがわかるようになってもらいたいですね」

日展を盛り上げる若者に期待

作家を目指す若い人に対しては、「作家になることで、普通のレベルの暮らしが出来なくなると敬遠する人も多いと思います。たしかに芸術で生活はなかなかむずかしい時代に入っているかもしれませんが、ものを創り、作品を生み出すことはとても有意義なことです。一人でも多くの優秀な作家が芸術界にとどまってくださり、日本の文化力が高まることを望んでいます。仕事しながらでもいいので、是非、日展を盛り上げようという若者を期待しています」。



花の色　古今和歌集　小野小町



来ぬ人を　小倉百人一首

日展会期中のイベント ―日展をより深く楽しむために

会期中の土日を中心に講演会や映像による作品解説会を開催します。
また、親子で鑑賞と制作を行う教室、日展作家が自ら作品解説を行う各種ギャラリーでの鑑賞会があります。日展をより深く楽しむために、ぜひご参加ください。

講演会・シンポジウム・映像による作品解説

場所:国立新美術館3階講堂（入場無料）

10月29日（土）午後1:30-3:30　※途中10分休憩
- **映像による作品解説「自作を語る」** 今年度受賞者
- **「土屋禮一と新入選者による作品解説と座談会」** 土屋禮一 今年度新入選者

10月30日（日）午後1:30-3:30　※途中10分休憩
- **「今年の受賞者と作品の紹介」** 今年度審査員 今年度受賞者
- **シンポジウムによる討論会「日展の洋画」** 藤森兼明 佐藤 哲 今年度審査主任

11月3日（木･祝）午後1:30-3:30　※途中10分休憩
- **シンポジウムによる討論会「彫刻を語る」**
  柴田良貴 西村祐一 伊庭照実 小西徳泉 宮坂慎司
- **映像による作品解説「彫刻」** 佐藤敬助 寒河江淳二 一鍬田 徹

11月5日（土）午後1:30-3:00
- **特別講演会「日本人のわすれもの」**
  京都市立芸術大学名誉教授 中西 進 氏

11月12日(土)【日展の日】午後 1:30〜3:30　※途中10分休憩
- **シンポジウムによる討論会「日展の工芸美術は何処に向かうか」**
  武腰敏昭 春山文典 大樋年雄
- **映像による作品解説「今年度の受賞者が語る―2016年日本の工芸」** 今年度受賞者

11月19日（土）午後1:30-3:30　※途中10分休憩
- **シンポジウムによる討論会「日展の書」**
  星 弘道 土橋靖子 中村伸夫 和中簡堂
- **映像による作品解説「書」** 市澤静山 師田久子 真神巍堂

11月23日(水･祝)　午後1:30~2:30　**・映像による作品解説「工芸美術」** 今年度審査員
2:40~3:40　**・映像による作品解説「日本画」** 加藤 晋 佐々木 曜

11月26日(土)　午後1:30~2:30　**・映像による作品解説「彫刻」** 上田久利 藤原健太郎 吉岡 徹
2:40~3:40　**・映像による作品解説「洋画」** 根岸右司 北本雅己

11月27日(日)　午後1:30~2:30　**・映像による作品解説「書」** 河野 隆 日比野 実 吉澤鐵之

親子鑑賞教室　小・中学生と保護者対象 事前予約要

小・中学生とその保護者を対象に、日展作家が、部門ごとに会場で作品を見ながら説明。
簡単な作品制作も指導します。

定員　各部門10組20名程度。
日時　11月6日（日）・13日（日）・20日（日）
10:30〜 日本画、洋画、書
14:00〜 彫刻、工芸美術

場所　国立新美術館3階講堂と展示室
参加費　無料。保護者は入場券をご用意ください。

親子鑑賞教室のようす

申し込み方法
往復はがきに参加希望者の住所・電話番号・氏名・年齢・人数・希望日・希望部門（第2希望まで）明記の上、〒110-0002 台東区上野桜木2-4-1日展事務局・親子鑑賞教室係まで10/28締め切り必着でご応募ください。TEL03-3823-5701

展示室での作品解説会

日展作家から展示室で作品解説を直接聞ける、またとないチャンスです。
以下のイベントがあります。

① らくらく鑑賞会　一般対象 事前予約要

日展作家とともに、時間をかけてゆっくり鑑賞していきます。昼食が付いた1日コースです。

定員　各回10-15名
日時　11月7日（月）・14日（月）・21日（月）・28日（月）
10:30集合 16:10解散　（昼食付）
参加費　1名5,000円（入場料、昼食、テキストほか）予約はTEL.03-3823-5701まで。

② ミニ解説会　一般対象

平日の午後1:30から各部門で日展作家が30分間作品解説を行います。
お一人でも気軽にご参加ください。

定員　各部門20名。5部門で同時開催
日時　会期中の平日（初日、日展の日を除く）　午後1:30から30分程度
参加費　無料、各自入場券をご用意ください。予約制:当日受付あり

③ グループ作品解説　15名前後の団体対象 事前予約要

平日に15名前後の団体で作品解説をご希望の方に、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書のうちいずれか1部門を1時間かけて日展作家がご案内いたします。また、学生団体について、校外学習やクラブ活動など、学年や目的に応じた解説をいたしますので、事前にご相談、ご予約ください。
TEL.03-3823-5701

参考資料

日展の応募と審査

1人1点のみ応募でき、作品の大きさに規定あり。10月に搬入後、審査

作品の大きさは、各部門ごとに規定されています。毎年10月に、1人1点を搬入し、日展審査員による入念な審査で入選が決定されます。昨年は12,007点の応募があり、2,268点が入選しており、全体では19パーセントが入選となりました。書が最も多く8,717点のうち952点が入選で11パーセントと狭き門になっています。なお、昨年は新たな入選数は全体で355点でした。

改組 新 第2回日展 応募点数および陳列点数 2015年秋

	日本画	洋画	彫刻	工芸美術	書	合計
総搬入数（前年度比）	452 (−39)	1967 (−29)	147 (−8)	724 (−72)	8,717 (−483)	12,007 (−631)
入選点数（新入選）	199 (20)	587 (65)	100 (7)	430 (36)	952 (227)	2,268 (355)
無鑑査点数	133	129	159	131	143	695
陳列点数	332	716	259	561	1,095	2,963

出品者のなかから選ばれる各賞

・入選者のなかから選ばれる特選　各科10点以内

何回も入選や受賞し、団体から力を認められると日展会員となることができます。

〈参考：その他今回の受賞〉

・**大臣賞**（全作品対象）

内閣総理大臣賞 彫刻、工芸美術、書に1点ずつ

文部科学大臣賞 日本画、洋画に1点ずつ

・**東京都知事賞**（全作品対象）

各科1点ずつ

・**日展会員賞**（会員作品対象）

各科1点ずつ

日展と文学

日展は、その時代ごとにさまざまな芸術家を輩出してきました。芸術家と文学者の交流もさかんであり、多くの文学作品に日展作家が登場しています。

上村松園

宮尾登美子作『序の舞』の主人公・島村津也は、日展で活躍した上村松園がモデルとなっています。天才少女と騒がれた津也は、第1回文展に出品した「長屋」で3等賞を受賞。母子家庭に育ち、当時男性世界だった画壇でさまざまな逆風に耐えながら名作を生み出していきます。未婚の母として息子松篁を育てる一方、「焔」では光源氏の愛人・六条御息所が、正妻の葵上に嫉妬して生霊となった姿を描き、松園自身「なぜこのような凄絶な作品を描いたのか自分でも分からない」と語り、この後、3年間出品しませんでした。その約20年後、様々な苦悩を克服して昭和11年息子の嫁たね子をモデルに「序の舞」を描きます。「女性の内に潜む強い意志をこの絵に表現したかった。一点の卑俗なところもなく、清澄な感じのする香り高い珠玉のような絵こそ、私の念願するものなのです」（松園）。後に女性初の文化勲章を受章。日本画家として日展に出品していた息子も後に文化勲章を受章。生涯を絵に捧げ、美しくも壮絶な一生を送りました。

上村松園「序の舞」1936年
東京藝術大学蔵

夏目漱石と日展の画家たちの交流

夏目漱石（1867-1916）は絵画にも造詣が深い作家でした。作品のなかで第1回文展の審査員の浅井忠をモデルにしたこともあります。また、漱石の友人中村不折は第1回文展から西洋画を出品し、審査委員でもありました。秋になり文展の開催時期となると漱石の手紙には、季節の挨拶代わりに「文展」の字が出てきました。「上野に文部省の展覧会あり」（明治41年10月27日の手紙より）「御手紙拝見、文展の批評思ったより長くなり候」（大正元年10月21日の手紙より）。また、漱石は東京朝日新聞に1912年大正元年の第6回文展の美術展覧会評を「文展と芸術」というタイトルで書いており、「芸術は自己の表現に始って、自己の表現に終るものである」というのが漱石の信条でした。また森鴎外も第1回文展から審査委員を続けており、美術と文学が深くかかわって進歩していたという興味深い事実があります。漱石は、文展に落選した作家にも期待を述べており、また、当時は落選者も落選展覧会やグループ展、個展を開催し、美術界が活性化していました。

2015年 改組 新 第2回 日展の大臣賞受賞作品

広報画像

日本画 内閣総理大臣賞受賞
渡辺信喜「夏草」
〈作家のことば〉
露がついた夏草に朝の光があたり一瞬白く輝いてみえた光景が印象的で、早朝の涼気が表現できればと描いてみました。

洋画 内閣総理大臣賞受賞
根岸右司「北海の岬」
〈作家のことば〉
先ほどまで吹雪で視界がきかなかったが、急に雲が流れ雪が止み、番屋が見下せるところまでたどりつけた。黒々とした岬が白い冠を戴き、海鳴りが静寂を破り寂しさを募らせる。夜の帳がおりる前に吉祥の光が差し、晩照の美しさに心をうばわれ、この自然に巡り会えた幸をかみしめる。荒れた海と冠雪の堂々とした岬を描きたかった。

彫刻 文部科学大臣賞受賞
柴田良貴「夕暮れの立像」
〈作家のことば〉
これから夜の闇が訪れる。夕暮れのその一瞬、この女性は身体に僅かに揺れを感じつつも想念をできるだけ消し去りながら、確かに立とうとしていた。やがてあらゆる音が消え、視界は漆黒の闇にとけていく。自身の有り様は限りなく無に近づくように思えた。その時の女性の立像。

工芸美術 文部科学大臣賞受賞
石川充宏「佇む王妃」
〈作家のことば〉
古代エジプトの王妃像をモチーフに、凜として佇む王妃をイメージして制作しました。できるだけ無駄を省き、平明な形態を銅板と黄銅板を鍛金技法により制作しました。仕上げは金属の表面に生漆を焼き付けた後、内部に赤色漆を塗布したのがこの作品の特徴です。

書 文部科学大臣賞受賞
髙木聖雨「駿歩」
〈作家のことば〉
西周金文を素材にして、大字二文字で制作した。最も古い古代文字にいかに現代性を表出できるかが最大の課題である。“黒白相変”、黒と白のせめぎ合いをいつも念頭に書作している。

日展 五科の紹介

広報画像

日本画

日本の伝統的な絵画で、絹や紙に天然の鉱物を使った「岩絵の具」で描かれます。日展では鈴木竹柏、中路融人、岩倉 寿、川崎春彦、土屋禮一、福田千惠、山崎隆夫らが世界に誇る日本画の伝統を重んじながら、新しい時代にふさわしい個性ゆたかな、清新な日本画を打ち出しています。

過去の著名作家

横山大観（1868-1958）、東山魁夷（1908-1999）
杉山寧（1909-1993）、髙山辰雄（1912-2007）

鈴木竹柏「春陽」
〈作家のことば〉
陽がのぼり山桜が咲き、ほのかに香りがただよう山の朝。

洋画

キャンバス（布）に油絵の具で描く油彩画のほか、水彩画、版画があります。日展では中山忠彦、塗師祥一郎、寺坂公雄、村田省蔵、藤森兼明、佐藤 哲、樋口 洋、根岸右司、湯山俊久らが日本の風土から生まれた、はつらつとした現代の具象絵画をめざしています。

過去の著名作家

黒田清輝（1866-1924）、藤島武二（1867-1943）
棟方志功（1903-1975）

塗師祥一郎「山麓雪景」
〈作家のことば〉
雪舞う1月、山形に出かけた。雲は低く垂れ籠め、新雪は美しく無彩色の世界である。今までこの季節のスケッチはあまりしていない。雪の中に身をおくと静寂の世界、鉛筆をはしらす音も雪に吸い取られてしまう。この情景を表現したく筆を執った。

彫刻

人や動物などの形を石や木を彫ったり（彫像）、粘土を固めたり（塑像）して作る立体的な芸術です。日展では中村晋也、雨宮敬子、橋本堅太郎、川崎普照、蛭田二郎、能島征二、山本眞輔、神戸峰男、山田朝彦らが、すこぶる健康的で、手堅いリアリティの中にも、日本的ロマンのある作品をみせています。

過去の著名作家

高村光雲（1852-1934）、朝倉文夫（1883-1964）
清水多嘉示（1897-1981）、山崎朝雲（1867-1954）

中村晋也「天璋院(篤姫)」
〈作家のことば〉
薩摩島津家から、第十三代将軍徳川家定に嫁いだ篤姫は、家定亡きあと天璋院となり、幕末の動乱期を「江戸城無血開城」に導くなど、徳川家のために尽くしたことで知られる。その凜とした生き方を表現した。

工芸美術

実用品に美しさや装飾性を加えて作られた作品で、陶磁器、漆、染色、彫金、ガラスなどさまざまな種類があります。
日展では陶磁器や漆、紙工芸から人形にいたるまで、多種多彩な材質・形態の作品が多く、奥田小由女、大樋年朗、三谷吾一、今井政之、中井貞次、武腰敏昭、森野泰明、伊藤裕司、春山文典、服部峻昇らが、きわめて革新的に多彩な現代工芸の魅力ある世界を展開しています。

過去の著名作家

板谷波山（1872-1963）、楠部彌弌（1897-1984）
松田権六（1896-1986）

奥田小由女「天空への祈り」
〈作家のことば〉
戦後70年を迎えながら、自然の猛威や戦争のくり返し、人間の諍いなど私達の平和を祈る思いも届きにくく、あまりにも悲しい事が多すぎてただひたすら祈りを捧げるしかないという思いで制作いたしました。いつも両陛下が祈りを捧げられるお姿にも感動し心動かされました。献花には手造りのカラーの花を添えました。

三谷吾一「黄昏」
〈作家のことば〉
子供の頃の夏休み、野原で蜻蛉がよく飛んでいて、日が暮れて暗くなるまで遊んで帰ると叱られたことを懐かしく想い出し、構図を考えました。蜻蛉は金箔プラチナ箔、沈金点彫り手法を用いパール粉で彩色を施しました。

書

毛筆を使って文字を書く芸術で、中国で古くから発達した漢字、日本のかな文字、石などに文字をほる「篆刻」があります。日展では日比野光鳳、高木聖鶴、井茂圭洞、新井光風、黒田賢一、星 弘道らが深く東洋の伝統を理解しながら、漢字に、仮名に、調和体に、また篆刻に今日のいぶきをみせた斬新な作品を発表しています。

過去の著名作家

青山杉雨（1912-1993）、尾上柴舟（1876-1957）
日比野五鳳（1901-1985）

日比野光鳳「新年」
〈作家のことば〉
万葉集全巻の末尾を飾るのが本歌。新年に降る雪がどんどん積もるように今年も良いことがたくさん積もればいいですね、という意味。新年の雪は良い年になる前兆という言い伝えがあるそうです。一年一年誰もが年齢を重ねますが、どなたも健康で毎日が充実していて欲しいという思いを私も抱いております。

改組 新 第3回 日展 開催概要

10月28日より、今年も日展を開催いたします。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5科にわたり、全国各地から応募された作品の入選者ならびに日展会員、準会員、前年度特選受賞者の作品、約3,000点が、国立新美術館の展示室に一堂に介します。幅広いジャンルの芸術作品、しかも現代の傾向をご覧いただけます。東京展の後、全国を巡回します。

展覧会名　改組 新 第3回 日本美術展覧会
英文名　The 3rd Reorganized New NITTEN The Japan Fine Arts Exhibition
会期　平成28年10月28日(金)～12月4日(日)
〔休館日〕毎週火曜日
〔観覧時間〕午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）
※11月12日(土)は「日展の日」として、入場無料となります。
会場　国立新美術館　東京都港区六本木 7-22-2
東京メトロ千代田線 乃木坂駅 直結
都営大江戸線 六本木駅 7出口徒歩約4分
東京メトロ日比谷線 六本木駅 4a出口徒歩約5分

主催　公益社団法人 日展
後援　文化庁／東京都

陳列点数 約3,000点（日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書）
本年度の日展応募者の中から入選者と、無鑑査（日展会員・準会員・前年度特選受賞者）の作品を展示。

入場料

	一般	高・大学生
当日券	1,200円	700円
前売券・団体券	1,000円	500円

小・中学生は無料。
団体券は20名以上。20枚購入につき招待券を1枚進呈。前売券は、チケットぴあ、ローソンチケット、CNプレイガイドほか主要プレイガイド、デパート友の会、画廊、画材店、JTB、近畿日本ツーリスト、東京メトロ定期券売り場などで発売。
（前売券販売期間:9月1日～10月27日）＊東京メトロは一般券のみ。一部定期券売り場を除く

★お得なチケット★

ペアチケット（前売りコンピューターチケットのみ）
1枚 1,800円。お二人で入場の方、またはお一人で会期中2回入場いただく方にお得なチケットです。
（他の割引との併用はできません。販売期間は前売券と同じ）

トワイライトチケット（時間限定入場券・会場窓口販売）
夕方の2時間、通常料金の1/4の価格でご覧いただける絶好のチャンスです。作品点数が多いので、科ごとにご覧になるなど、何度も分けてご覧いただくにもお得なチケットです。
観覧時間:午後4時～午後6時　入場料:一般300円／高・大学生200円

巡回展　京都、名古屋、大阪、富山

日展の特徴とみどころ

今年109年目の美術団体

日本が鎖国をやめて、西洋の文化を取り入れ、新たな文化国家を目指し始めた頃、日本の美術振興を目的に1907年明治40年に始まった文部省美術展覧会（文展）が基となっています。現在は民間団体、公益社団法人日展が開催。今年109年目となる美術団体です。

日本で最も大きな公募展

全国各地から約12,000点の応募作品が集まります。そのなかで昨年は2,268点が選ばれ、無鑑査の作品とともに、約3,000点が5つからなる部門毎に会場いっぱいに展示されます。

日展は5科（日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書）がそろう、世界でも類を見ない総合的な公募展

芸術の中でも5つの部門を総合的に鑑賞できる展覧会です。来館者は、科ごとに展示された作品を鑑賞しながら、心に響く部門や作品を探す楽しみがあります。日展作家は、他の科との交流を通し、刺激を受け合うことでまた新たな創作へとつなげています。

日本の芸術家の渾身の最新作が集結

厳しい審査を経て選ばれた作品。会場には、作家のエネルギーが満ち溢れています。現代日本を生きる10代から100歳までの全国に散らばる芸術家が世の中を敏感にキャッチし、自ら表現した作品は、日本の今を映しているともいえます。最新の芸術作品を鑑賞することができます。

日展で活躍した芸術家たち

109年の伝統のなかで、さまざまな芸術家を輩出してきました。
かつて日展三山と言われた 日本画家 東山魁夷、杉山寧、髙山辰雄をはじめ、横山大観。
洋画では、東京美術学校に油絵科を設立した黒田清輝、藤島武二、棟方志功。
彫刻では高村光雲、朝倉文夫、清水多嘉示、山崎朝雲。工芸美術では板谷波山、楠部彌弌、松田権六。書は青山杉雨、尾上柴舟、日比野五鳳をはじめ、日本の美術界に功績を残す数々の芸術家を輩出しています。

全国の日展会員がバックアップし、鑑賞を助けるさまざまなイベントを開催。
(イベントページをご覧ください)

改組 新 第3回
日展公募ポスター